2018 年 4 月 1 日

「三重の風景」～2018 年度のはじめにあたり～

写真好学研究所
桝屋善則

写真好学研究所では昨年度から引き継ぎ、今年度も「三重の風景」をテーマとして活動することになった。昨年度は「風景とは？」について根元的に思いを巡らし、その定義、意味を探った。その延長線上で私も私にとっての活動するなか「三重の風景（写真）とは？」について考えた。ここでは、私が写真好学研究所の活動に参加するに至った経緯を紹介しつつ、現在私が考える「三重の風景（写真）」について説明する。

私が写真を撮り始めたのは 2010 年の春、カメラは私の拙い記憶に代わり神社巡りなどを記録するための道具として携行されることになった。写真を撮っただけでは記憶にも劣る状態となってしまうため、記録としていつでもどこからでもアクセスできるようにブログを立ち上げることにした。これで記憶に代わる記録としての役割が果たせる。なお、私はお祭などでも一般の方が注目するメインイベントだけでなく、その前後の準備から片付けまでのように全体のプロセスに興味がある。そのためにアップする写真枚数が半端ではなく、ブログ閲覧を快適にするためには画像解像度を適度に設定する必要がある。結局のところは長辺を 640 ドットに抑えた。そのおかげで撮影する画像に過度な画質は必要ではなかった。このように週末の活動を記録するメディアとして写真を活用し、それらをネットに掲載するスタンスは今でも変わらない。

それならば、写真はネット掲載するもので印刷して他者に観ていただくという発想は全くなかった私がなぜに写真好学研究所に所属しているのだろうか？ それは第 62 回神宮式年遷宮のお白石持行事において当研究所の所長である松原豊さんとの出会いがあったからだ。あれは 2013 年の夏、私はボランティアとしてお白石持行事に参加する特別神領民をサポートしつつ、空き時間には地元神領民のお白石奉献を追いかけていた。その時、御遷宮対策委員会の専属カメラマンとして活躍していたのが松原さんだった。時々お目にかかかり面識ができた。そしてお白石行事の終盤にはお互いが真っ黒な顔になっていた。

そんな楽しい夏の思い出も忘れてしまいそうになった 2015 年の12月、志摩市歴史民俗資料館の主催により「波切 写真講座」が開催された。その写真講座の講師が松原さんであり、久しぶりの再会を果たすとともに写真の面白さを認識させていただいた。この時にデジカメでもモノクロ写真を撮れることを知り、それ以降は毎日のようにモノクロ写真を撮影するようになった。また、この写真講座の際に松原さんからグループ写真展へのお誘いをいただくと、2016年の春に美里ふるさと資料館で開催された写真展「身近な風景 ～ Familiarium landscape ～」に参加していた。写真をブログにしか掲載していなかった私にとって写真を印刷する、さらには展示するなんて夢のよう話だったが、松原さんに引っ張られるようにあれよあれよと進んでいった。このグループ写真展に参加したことで写真好学研究所の立ち上げ時から参加する機会を得て今に至っている。以上、私が今写真好学研究所の活動に参加できている経緯である。

さて、続いては「三重の風景」について。先述のように写真好学研究所では昨年の年初より風景とは何かについて議論を重ねたが結論には至っていない。しかし、「風景とは何か」について思いを巡らし深く考えることが重要なのだろう。各人が風景について考える機会を得たことで撮影する際にそのことを意識するようになったのではないだろうか。しかし極論すれば共通の概念は存在しないのだろう。そこで、このような議論と思考を重ねたなかで私が見つけた「風景」について述べることにする。「風景」とは「あるがまま」の状態で、風景写真とはその状態を捉えたもの、つまり撮影者も肩肘張らずに「あるがまま」であること。その環境に一体化された撮影者が撮らえたものが風景だと考えるようになった。

私は「波切 写真講座」でモノクロ写真に興味を持ちモノクロ写真も撮るようになった。なぜにモノクロで写真を撮るのか、最初は面白さで始まったがその理由を求めるには続けてみるしかない。毎朝書いている般若心経のように、モノクロ写真も毎日撮影することにした。そのためにSNS（TwitterとFacebook）にて「モノクロームな日々」と称し毎日一枚のモノクロ写真を投稿し続けている。平日は昼休みウォーキングの際に撮影できるモノを中心に、週末は適当に必ず一枚のモノクロ写真をアップしている。特に平日は食事後のウォーキング中（約30分）に被写体を見つけてパチリ。昼休み終了までの約10分で投稿することを繰り返している。ウォーキングのルートは毎日変えようと思っても30分で巡れるルートは限られる。日々発見を求めて歩いているが、それには限界があり続けることにより環境は当たり前になる。つまり「ありのまま」に近くなって来る。これが私にとっての「風景」となっている。（のだろう。）

それではなぜにモノクロに拘るのだろう。それにはまず情報伝達方法の起源を考えねばならないだろう。
・・・音での伝達（叫びなど）、ボディランゲージ、煙、文字、絵、写真、動画・・・
このような情報伝達の一手法として写真も発明されたが、人間が目で見ているようなフルカラーな情報を撮影する性能は実現できなかったからまずはモノクロで始まった。つまり、本来の要求には不十分な状態での道具だったのである。不十分とは何を意味しているのだろうか、それでは十分とはなんだろう。カラー写真で十分なのだろうか。ここから十分なものは目的により異なることが分かる。このように考えるとモノクロの世界とは色という不要な装飾を絶った世界、何か漠然とはしているが集約された本質の世界が詰め込まれているのではないだろうか。本質こそ「あるがまま」。

毎日「モノクロームな日々」と向かい会い、今はそんな印象をもっている。

以上のことから（無理やりかもしれないが）
私は「景色」=「あるがまま」、そして「モノクローム」=「あるがまま（飾らない本質）」の考えに至った。

このように「モノクロームな日々」で撮っている写真は「風景」である。さらに、三重の地で撮ればそれは「三重の風景」。毎日が「三重の風景」である。

SNSが無くならない限り、今後も「モノクロームな日々」を撮り続けたい。

以上